碑文と英雄叙事詩が語る

ウイグル創世記

Ⅰ ウイグル・カガン国成立までの略史

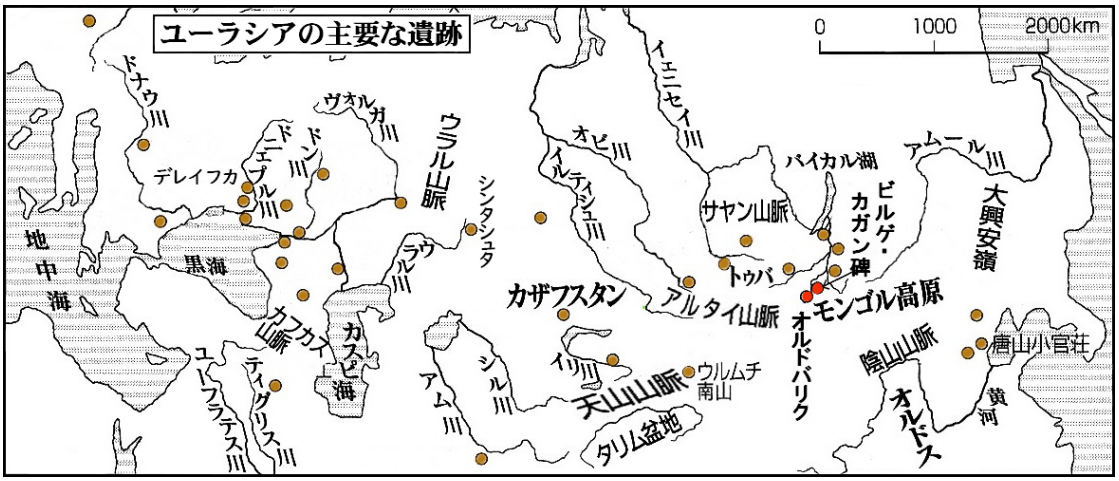
Ⅱ シネウス碑文を読む

Ⅲ オグズ・ナーメ（オグズの書）を読む

東 綾子

第１部　ウイグル・カガン国成立までの略史

１　騎馬遊牧民の登場



地図１

ウイグル人の祖先は騎馬遊牧民です。「丁零」という名で中国の歴史書に登場するのは二世紀の中頃ですが、実際には紀元前３世紀の末頃にはバイカル湖付近で遊牧をしていたとされています。

動物の家畜化は西アジアで紀元前 6600 年（紀元前 7600 年とも）に始まっていたと言われています。その少し前の時期に植物の栽培化を果たしていた人々は、羊やヤギの飼育を開始してから長い時間をかけて牛、豚を家畜化していきました。

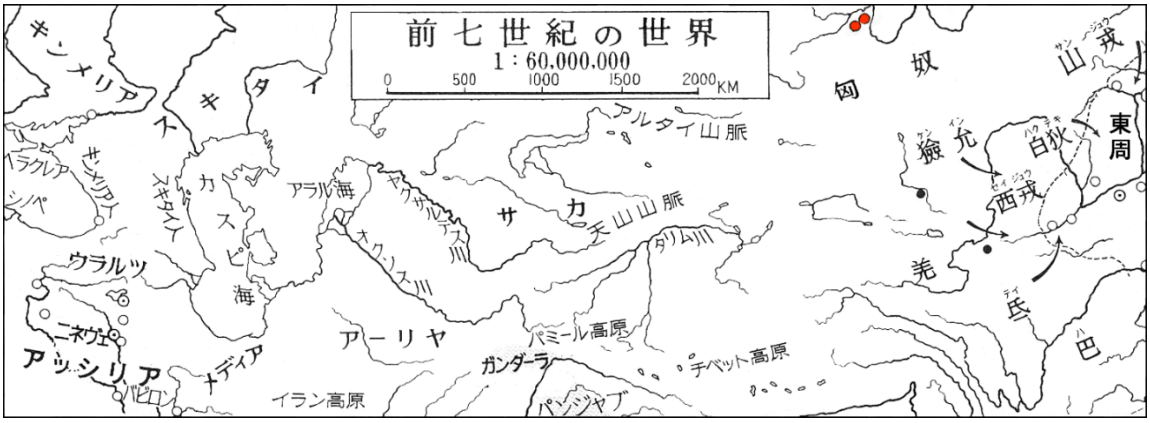
ドニエプル川の下流近くにあるデレイフカ遺跡から発見された馬の歯型から、この時代（B.C.4000～b.c.3500）にはすでに馬に騎乗していたのではないかと言われています。さらに、シンタシュタの遺跡からは二輪車の副葬品が発掘されていますが、二輪車は馬の引く戦車として使われていたと推測されています。これが紀元前 1600 年のことです。

紀元前 10 世紀から紀元前９世紀になると、草原の砂漠化が徐々に進んできました。草原地帯で農業と牧畜を同時に営んでいた人々のうち、南のほうの水の確保できるオアシスにいた人々は定住した農耕民となり、北の方にいた人々は牧草地を求めて移動しながら牧畜を営む専業の遊牧民となりました。そして、馬を家畜化したことで遊牧民の活動範囲は飛躍的に広がりました。

どんな場所にあっても、人々の数が増えて集団ができると、さまざまな原因で争いが起こるものですが、遊牧民の場合は狩猟の場所や放牧地をめぐって争いが起こるのは必然でした。いくつかの部族は自分たちの生き残りをかけ、部族連合を作り上げました。これが騎馬遊牧民国家の原型となりました。

何か問題が起こったときには各部族の長たちが集まって、そこでどう対処すればよいかという決定が下されました。リーダーの統率能力と決断力は自分たちの運命を左右するものですから、優秀な人物を選ぶために話し合いが必要だったのです。

２　匈奴の支配



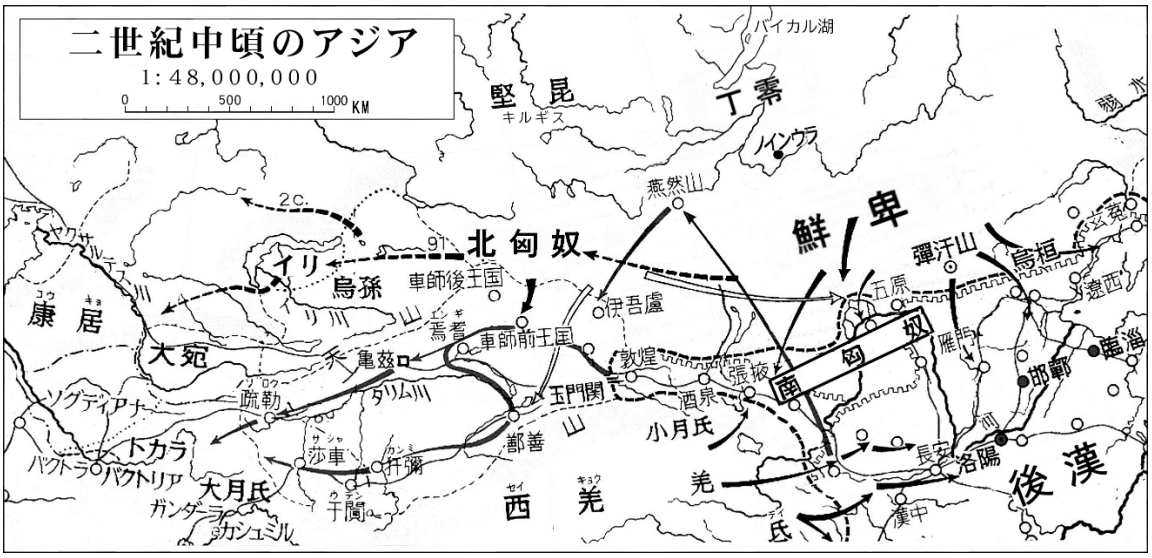
地図２

上の地図で西からキンメリア、スキタイ、サカ、匈奴、とあるのは、大勢力を誇った騎馬遊牧民集団の名前です。匈奴は B.C.1500 年ごろからその活動が知られています。山戎、白狄、檢允、西戎という名前が地図に見えますが、彼らも騎馬遊牧民の集団です。

モンゴル高原にはほかにも東胡、月氏という名の強大な遊牧民集団がいたのですが、匈奴が彼らを追い払ってモンゴル高原の覇者となりました。

匈奴はバートル・テングリクトゥ（冒頓単于、在位 B.C.209-175）が指導者になると遠征に遠征を重ね、中央ユーラシア東部にまで届くほどの勢力圏を築き上げました。しかし、王国の後期になると王位継承の争いが起こり匈奴は分裂を起こし、中国の史書では南匈奴（東匈奴）と北匈奴（西匈奴）と書かれるようになります。これは紀元 48 年のことです。

３　鮮卑の台頭



地図３

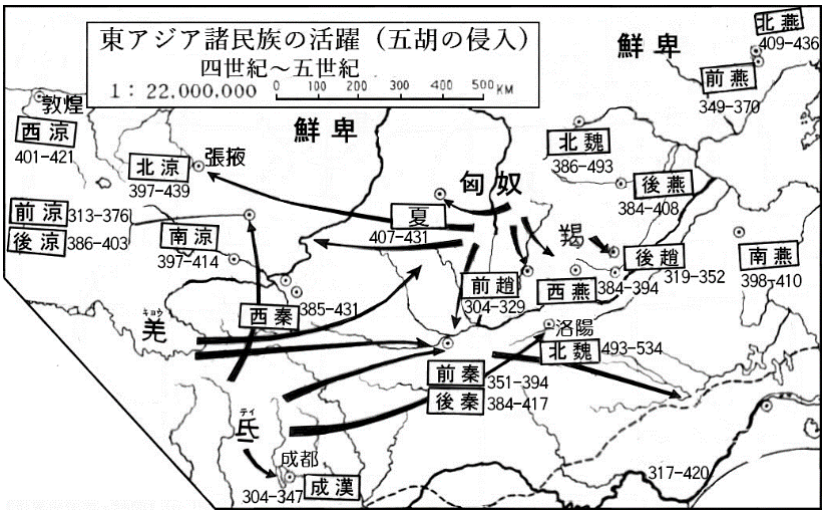
匈奴が分裂して国力が弱まっていたとき、力を蓄えていた鮮卑が２世紀半ばに北匈奴を追い払い、モンゴル高原の統一を果たしました。鮮卑はかつて匈奴に滅ぼされて東方に逃れていた東胡の末裔です。

ここで騎馬遊牧民の特徴について少し補足しておきましょう。騎馬遊牧民は、ふだんから機動力と軍事力を兼ね備えた軍隊を持って遊牧しているようなものでした。平時は遊牧の仕事に携わっている屈強な男たちが、いざ戦闘となると騎兵に早変わりし、女性や老人、子供も後方から馬に乗ってついていき食糧の補給に従事するのですから、どれほどの長期戦になっても困ることがありません。女性たちも騎馬と矢を射る技術に秀でていました。経験を積んだ女性は尊敬され女性の地位は農耕民族と比べるとはるかに高いものでした。

バートゥル・テングリクトゥは中国の白登山という場所で漢の劉邦と対峙したとき、ほぼ勝利を目前としていたのですが、皇后からの伝言を聞き包囲を解いてしまいました。これは漢軍の軍師、陳平がバートゥル・テングリクトゥの正妻に贈り物をして、口実を設けて包囲を解くように指示してくれと頼んだからです。最高権力者が自分の妻のことばに逆らうことができなかったのですから、いかに彼女の力が強かったかがわかります。

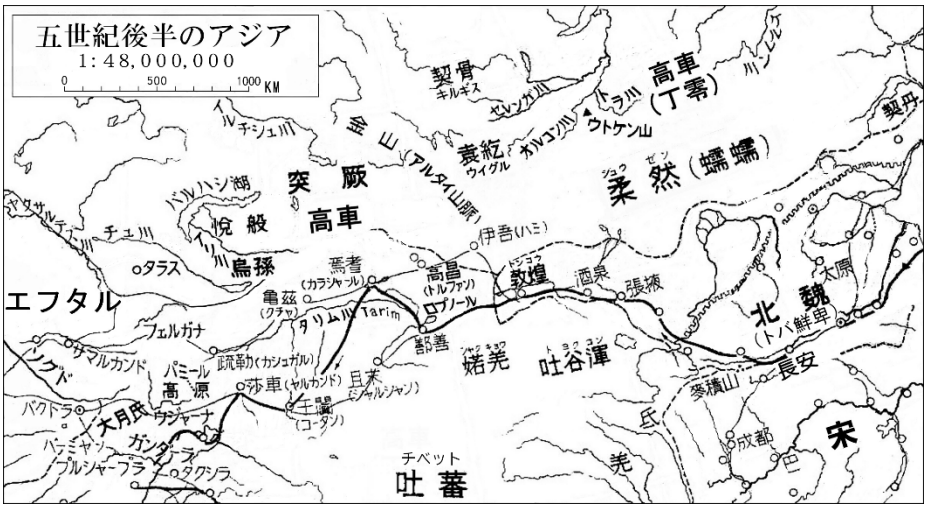
また騎馬遊牧民同士の戦いでは相手を全滅させることはありませんでした。家畜も人間も貴重な戦力となるからです。敗北したほうは逃げて別の場所に移動するか服属するかを選ぶことになります。上の地図で北匈奴が西へ移動しているのがわかりますが、この西へ移動した集団の中には、服属を選んだウイグル人の祖先である丁零の諸部族やほかの部族の集団も含まれています。

さて、鮮卑はモンゴル高原を統一したあと、各部がそれぞれ北燕や前燕といった国を興し、漢族風の名前や文化を受け入れるようになり、やがて中国に吸収されていきました。これらの国の中で匈奴と混血してトバ鮮卑と呼ばれていた部族が建てたのが北魏（386～）で、北魏は唐王朝の建国に影響を与えるほどの大国になりました。



地図４

５　柔然（アワル）の活動

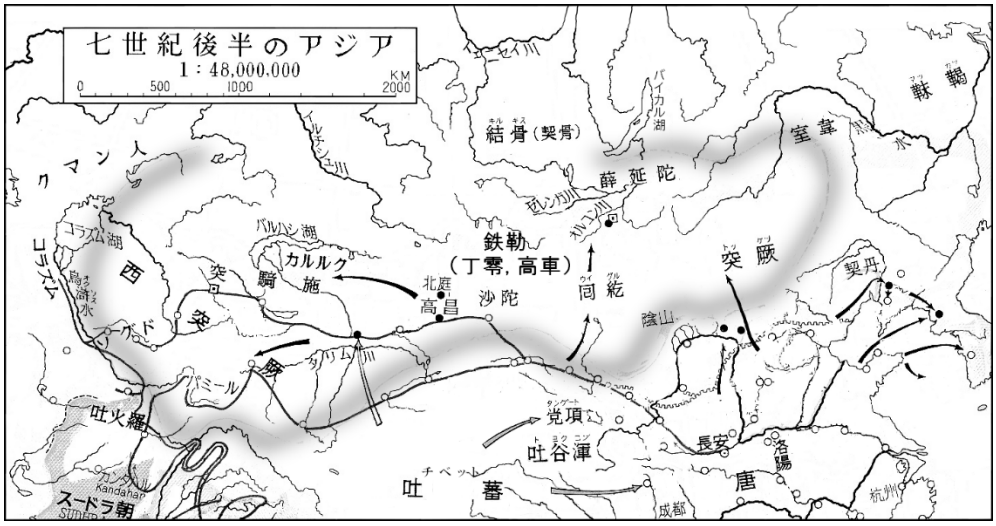


地図５

鮮卑がモンゴル高原を去ったあとにモンゴル高原の覇者となったのが柔然です。柔然の起源については、モンゴル系であるとかツングース系であるとか言われていますが確かなことはわかりません。ただ台頭してきたときの柔然の風俗習慣はウイグル人のそれと大差なく、また「カガン」という王を呼ぶ称号を使いはじめたのは柔然だとされています。

柔然は高車や北魏との戦いを繰り返したのち、555 年に突厥の攻撃を受けて「壊滅」しました。しかし実はこれは中国の史書の記述をもとにしたものであり、実際には５世紀から９世紀にかけて中央アジアや中央・東ヨーロッパにいたアワルという遊牧民族がいて、この民族が西へ移動してきた柔然と同一ではないかと言われています。ちなみにアワルも王をカガンと呼んでいます。

６　突厥の支配



地図６

柔然を滅ぼした突厥の起源は丁零にさかのぼり、イェニセイ川上流にその故地があったとされています。そこは鉄鉱石が豊富で、匈奴に支配されていたときに彼らは製鉄技術を会得し、鉄器を作る高い技術を誇っていました。突厥が柔然から独立しようと決意したの

は、柔然に婚姻を申し込んだとき、「鍛冶屋ごときが……」と一蹴されたことが要因の一つに挙げられています。

突厥は鍛冶の技術を持ち、かつ勇猛果敢な性格であったことから、南下してアルタイ山脈のふもとやトルファン西北のボグダ山、天山山脈に移り住むと急速に力をつけていき、テュルク系諸族の中では最強部族となりました。突厥は 552 年に建国されてから一時期（630 年～679 年）唐への服属の期間を経て、西突厥として再興し、745 年に滅亡するまで約 200 年間、ユーラシア大陸の広大な地域を支配する帝国を築き上げた、騎馬遊牧民の国家です。

現在のトルコ共和国は、自国の建国を突厥が建国された 552 年だと定めていますが、これは自分たちが偉大なる突厥の子孫であると自認したいからに他なりません。

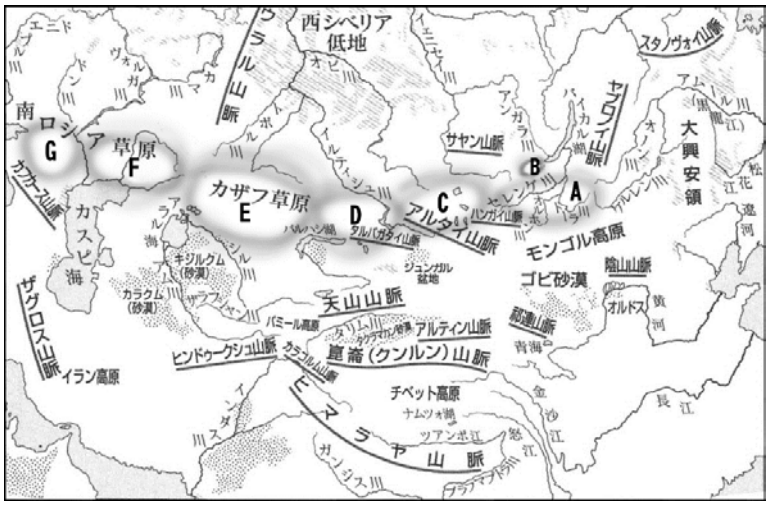
突厥の時代に特筆すべきことの一つが、突厥文字と呼ばれる文字を生み出したことです。突厥時代には王や大臣の紀功碑が彫られ、紀功碑が残っているおかげで、歴史の一部分がジグゾーパズルを当てはめるようにして明らかにされているのです。

突厥文字は通説ではセム系のアラム文字に由来すると言われてきましたが、ソグド文字に由来するとする説もあり、まだ確定されてはいません。アラビア語のように右から左へ書かれます。

7　ウイグル・カガン国の成立

ウイグル・カガン国は、初代のカガン、クトゥルク・ビルゲ・キョル・カガン（懐仁可汗 744(742)-747）が王位についた年、モンゴル高原に建国されました。しかし、実はウイグル人の祖先は匈奴、突厥、鮮卑、柔然に支配されていた時代にも、名前こそ「ウイグル」ではありませんでしたが、丁零、高車、鉄勒という名前で、中国の史書では**「最も多くの部族を擁している」**力を持った集団として書かれていました。

彼らは下の地図で示されるようにユーラシア大陸の東から西まで続く広い範囲に住んでいて、自分たちが同じテュルク系の同胞民族であることを知っていました。



←丁零（＝高車，鉄勒）諸部族の拡大地図７

A：ボグ、トングラ、ウイグル、バイルク、ボルクリ（エルキン）、モンチン、トルグル、ホグルス

B：トゥバ

C：チェビン、ブルジュ、アズ、スギナク、オグズ、キルギス、オニグル

D：スルタルドゥシュ、ジェルク、ザビンドゥ、チュルゲシ

E：エディズ、ハザル、ブルガル、ペチネク、コガイ、キプチャク、スワル、ボルタス、イエメク

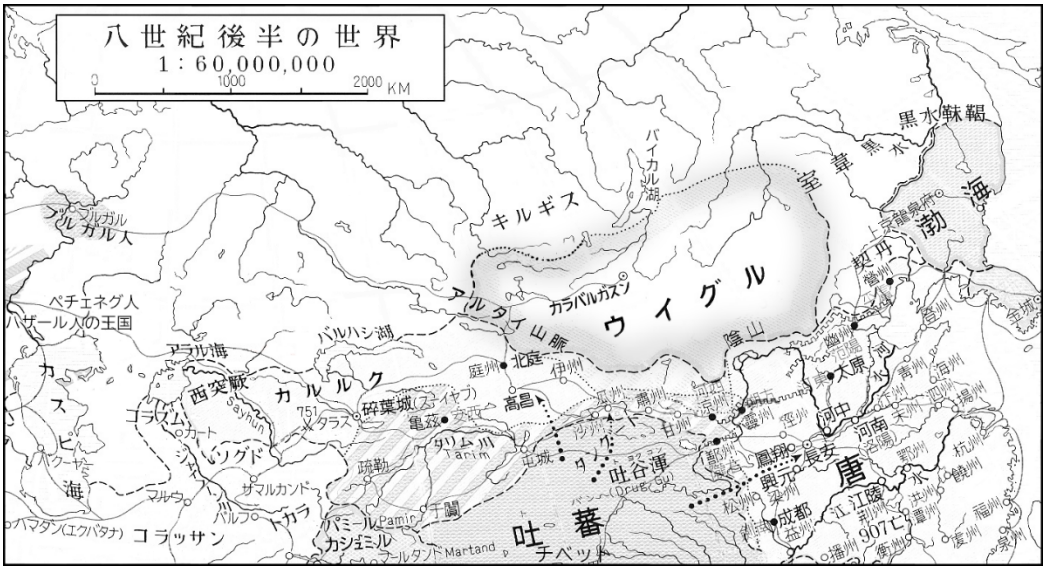
F　サリグル、サクスン、モクシャ、チェルケス

G　オグズ、アラン、バシキルド、フン

柔然に支配されていたとき、東側にいた丁零の諸部族は高車と呼ばれていました。彼らはまだ国家としての体裁を整えてはいませんでしたが、何度かの戦いを経て、徐々に外部の圧力から身を守るためには、さらに大きな集団となって力を持つことが必要だと考えるに至ったようです。

突厥支配時には「鉄勒」と史書に書かれるようになりましたが、この鉄勒諸族の中で有力な部族が連合してトクズ・オグズ（九姓オグズ）と呼ばれる部族連合ができました。

このトクズ・オグズは突厥が柔然を滅ぼすのに力を貸しましたが、後には突厥を滅ぼすほどの強力な部族連合となりました。このときにトクズ・オグズのリーダーに選出されたのがウイグル部族のヤグラカル氏出身の者だったので、彼らは自分たちの名称を「ウイグル」とすることにして、ここにはじめてウイグル・カガン国が誕生したのです。そしてクトゥルク・ビルゲ・キョル・カガン（懐仁可汗）が初代のカガンになり、突厥に代わってモンゴル高原を支配するようになりました。中国の史書ではウイグル・カガン国は、「回紇」「回鶻」と書かれています。

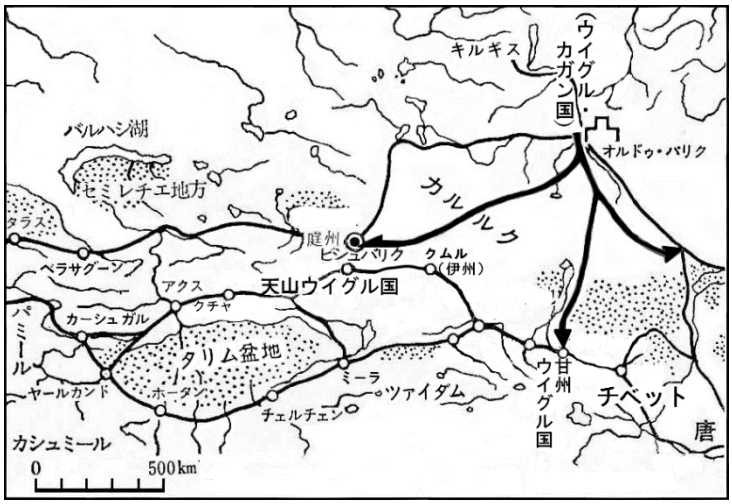


地図８

ウイグル・カガン国は 755 年に起こった安史の乱の鎮圧に力を貸したことで、唐には貸しを作ったかたちになり、唐からもたらされる税金と唐との絹馬貿易、そして東西交易によって得られた富を蓄え、大いに栄えました。芸術や文化が発展し、楽器の演奏や舞踊などが高度に洗練され、長安では大いにもてはやされました。

バヤンチョル(磨延啜)・カガン（葛勒可汗　713? - 759）が二代目のカガンになったときにはセリンガ河畔に、三代目のブグ・カガン（牟羽可汗　?-779）のときにはオルホン河畔に巨大な都市がつくられました。

しかし、栄枯盛衰は世の習いと言いますが、ウイグル・カガン国も例外ではありませんでした。建国から 100 年あまりたったころウイグル・カガン国は内部分裂を起こし、キルギスからの攻撃を受けカガンは殺されました。ちょうどその前後の年に天災に見舞われていて、多数の家畜や人間の命が失われました。これ以上モンゴル高原にとどまってはいられなくなり、ウイグルの三人の王子はそれぞれ自分たちの配下にある 20 万から 30 万人の人々を引き連れ、西方や南への移住を余儀なくされました。



地図９

移住していった土地には、匈奴や突厥の西への移動に付き従っていった丁零（高車、鉄勒）の同胞部族がすでに住んでいたので、彼らは容易に土地になじむことができました。

840 年にウイグル・カガン国の首都オルド・バリク周辺にいた数十万人の人間と百万頭の家畜を引き連れて西への移動を開始したパンテキンが、山を越え険しい道を経てクムルのバリコルに到達したのは、出発してから一年後のことでした。彼は 848 年に自分が王位に就くことを宣言しました。これが天山ウイグル国の始まりです。

また、甘州方面に移住していったウイグル人はその土地に以前から住んでいたウイグル人といっしょになって 870 年に甘州ウイグル国を建てました。

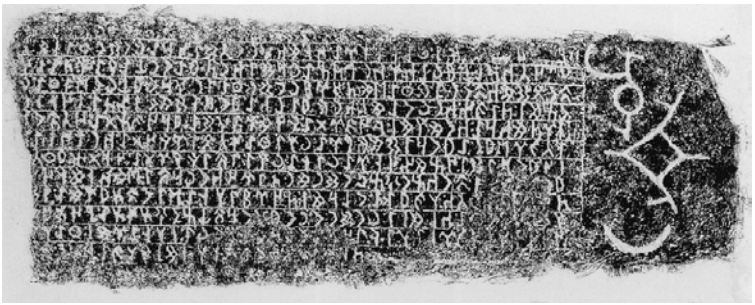
天山ウイグル国も甘州ウイグル国は西方諸国と、唐朝のあとに成立した北宋とのあいだの通商交易路上に位置していましたので、中継貿易で大いに利益を上げて栄えました。しかし利益を求めるのはウイグル人だけではありません。天山ウイグル国や甘州ウイグル国にはチベットやキタン(西遼)、タングート(西夏)がたびたび攻めてきて、激しい戦いが何度も繰り返されました。

三人の王子のうちの一人、オゲテキンに率いられたもう一つのグループは南下して、唐に援助を求めましたが、唐には 30 万人の移住者を引き受ける能力はありませんでした。唐に投降する者やキルギスと戦って捕虜になる者などが現れ、移動する前には 30 万人いた人口が最終的には 500 人になっていました。そして彼らを率いていた王族はわずかの人数でひっそりと西へ向かい、やがて消息を絶ってしまいました。

ウイグル・カガン国の末裔が作った天山ウイグル国と甘州ウイグル国では、最初はマニ教が信仰されていましたが、後に仏教を受け入れ、クチャやトルファン、敦煌には多くの遺跡が作られました。この二つの国では突厥文字をもとにした古ウイグル文字が作り出され、この文字で記された多くの古文書はいまも内外の研究者よって解読され、当時の社会や文化の研究に大いに役立っています。

地図１は「中央ユーラシア史（山川出版社、2000）」16 ページを引用。
地図２から地図６、地図８は「世界史年表・地図（吉川弘文館、2016）」より、
ウイグル人の歴史に関する部分を取り出し民族名、国名、地名を選択して作成。
地図７はトルグン・アルマス著「ウイグル人」の記述をもとに筆者が作成。
地図９は中央アジアの歴史（間野英二・講談社、1977）96 頁を引用。

第２部　シネウス碑文を読む



シネウス碑文の拓本

突厥とウイグル・カガン国では、カガンや宰相が、自分がどれほど素晴らしい統治者であったか、その証を永遠に残そうと考え、業績を書いたものを石に彫らせました。最初はソグド語やサンスクリット語の文字が使われていましたが、突厥語が作られてからは突厥語の文字が使われるようになりました。

今後新たな発掘が行われて別の碑文が発見されたなら状況は変わってくると思われますが、今のところ、突厥文字で歴史に関する記述を持つ碑文の最古のものは、732 年以前のものだと言われています。

書かれている文字の量は違いますが、日本の最古の歴史書である古事記の成立が 712 年とされていますので、ほぼ同時期に二つの国で最古の歴史書が書かれていることがわかります。

これまでに発見された複数の碑文を解読して照らし合わせることによって、今まで漢語の文献だけで記されてきたウイグル人の歴史がより正確にわかるようになりました。また、歴史的事象がウイグル人の目から見て語られているのも、碑文の存在価値を高めています。

ここでは、ウイグル・カガン国二代目のカガン、バヤンチョル（磨延啜）が亡くなった直後に建てられたと言われているシネウス碑文を読んでいきます。シネウスという場所は、現在はモンゴルのセレンゲ県サイハン郡というところにあって、かつてウイグル・カガン国の首都があったカラバルガスンと同じ地域にあります。

テキストは『シネウス碑文訳注(2009 年)大阪大学アーカイブ（OUKA）』
〈https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/20767/sial24-001.pdf〉
の解読文を整えたもので、文字や記号は付け加えていません。原文では碑石の北東南西面に彫られた計 46 行が一行ごとに書かれ、判読不可能な文字の数だけ斜線（///）が引かれていますが、本文では読みやすいように、文字数に関係なく点（……）で表しました。

テングリデ＝ボルミシユ(天より生まれた)**エル＝エトミシユ**(国を建てた)**ビルゲ**(賢い)**可汗**……テリス(？)……オテュケン地方とオグレシユ地方、その二つの間で支配していたという。その河はセレンゲであったという。そこにてその国……独立して生活していたという。

に留まった者(あるいは生き残った者)が民衆であるオン＝ウイグル(十姓ウイグル)とトクズ・オグズ(九姓オグズ、九姓鉄勒)の上に百年間……オルホン河……突厥の可汗（たち）はまるまる 50 年間支配していたという。突厥の統治時代、私（磨延啜）の 26 歳の時(739 年)に、平和裡に……与えた（または*した）。

そこで……戻って(または、再び)……私は私のトクズ＝オグズの民を集めに集めて掌握した。私の父であるキョル＝ビルゲ可汗は……軍隊が進んだ。

私自身を彼は東方へ千人隊長として派遣した。ケイレに東方から私が戻ってくるような時に、羊、小羊のいる……

征服して、私は再び進軍した。ケイレの河源地帯にあるウッチ・ピルキュで、私は王の軍隊と合流した。そこで……に私は到着した。（既に）カラ＝クム（黒沙砂漠）を渡ってしまっており、キョゲルやキョミュル＝ターグ(炭山)やヤール河に(いる)三纛突厥の民に対して……

オズミシュ（烏蘇米施）＝テギンが(突厥)の王になったと聞いた。羊歳(743 年)に、私は出軍した。6 月 6 日に 2 回目の戦い(で敵)を打ち負かした。……（744 年)……私は(オズミシュ可汗を)捕らえた。そこで彼の可敦(カガンの正妻)を捕虜にした。その時以来、突厥の民はいなくなった。その後、鶏歳(745 年)に……(746 年)……

三姓カルルクは敵意を抱いて、(私の支配下から)逃げて行った。西の方、オン＝オク族(十箭すなわちもとの西突厥)(の地域)に竄入した。豚歳(747 年)に、9［都督］…… 民衆(?)……を感じて、彼(父で初代のキョル＝ビルゲ可汗)が(私を)ヤブグ(葉護)に任命した。その後、私の父である可汗はみまかった。民衆の行い……、鼠歳(748 年)に、……［ここに磨延啜の可汗即位記事があるはず］……タイ＝ビルゲ都督を……民衆……［牛歳(749 年)に］……私は***し、捕まえた、……

(749 年)3 月 1 日にピュケギュクにて私は(敵に)追い付いた。夕方、陽が沈んでいく時、私は戦って、そこで勝った。昼が[壊され]夜が消されたビュケギュクには、**セキズ＝オグズ**(**八姓オグズ**)**族**も**トクズ＝タタル**(**九姓タタル**)族も残らなかった。

(その月の) 2 日には、陽が昇る時に私は戦った。民は(可汗である)私の奴婢(である)、と天地(の神)が(私に)仰せになった。そこで私は(敵に)勝った。罪のある名士たちを*****天は(私のために)捕まえて下さった。名もない民衆たちを私は抹殺しなかった。彼らのテント(家)、家財、家畜を私は奪わなかった。私は(彼らに)肉体刑を言い渡した。(しかし)私は(彼らを)立ち上がらせて(もとの生活を立ちゆかせて)おいた。

「私のものたる民たちよ！」、「(私に)ついて来い」と私は言った。私は(彼らを)残しておいて立ち去った。(しかし)彼らはやって来なかった。また以前のように私は(彼らを)追いかけた。私はブルグで(彼らに)追い着いた。(749 年)4 月 9 日(または 29 日)に私は(彼らと)戦って勝った。彼らの家畜、動産、娘、寡婦を私は運び去った。

5 月に彼らは(私に)従属しに来た。セキズ＝オグズ(八姓オグズ)族、トクズ＝タタル(九姓タタル)族は一人残らずやって来た。セレンゲ(河)の西のイルン＝コルの南側のシプの河源地帯に至るまで、私は軍を配置した。

彼ら(敵)は***** 計略的にシプの河源地帯を偵察しにやって来た。アイグチはセレンゲ(河)に至るまで軍を展開(?)した。(749 年)5 月 29 日に、私は戦って、そこで勝った。私は(敵を)セレンゲ(河畔)に追い詰めて勝った。私は平定した。彼らの多くはセレンゲを下って行った。私はセレンゲを渡り、(彼らを)追って進軍した。戦闘で捕虜にして、(その中から)10 人を敵方に伝言させるために派遣した。

「**タイ＝ビルゲ都督**の卑劣さのゆえに、一、二の名士(貴人)の卑劣さのゆえに、私の平民よ！　諸君は死んだり路頭に迷ったりした。再び(私に)臣属せよ。(そうすれば)もう死なないであろう、路頭に迷わないであろう」と私は告げた。「以前のように私に奉仕せよ！」と私は告げた。２ヶ月私は待ったが、彼らはやって来なかった。(749 年) ８月１日に私は「軍を出そう」と言った。(軍)の纛が出陣しようとしたちょうどその時に、偵察の者が帰ってきた。「敵が来る」と彼らは告げた．敵と共にその首領が進軍してきた。

８[月]２日にチギルティル湖畔よりカスイ(河)に沿って行進し、私は戦った。そこで勝った。そこから私は追撃をした。その月の 15 日に、ケイレの河源地帯のウチ＝ビルキュで、タタル族と入り乱れて(戦い)、私が打ち負かした。その半分の民は(私に)服属した。その半分の民は**** に竄入した。

そこから私は引き返して、下馬した(居を落ち着けた)。オテュケン(山)の北側で私は冬営した。私は敵から解放され自由になった。私は２人の息子にヤブグとシャドの称号を与えた。私は(彼らを)タルドゥシュ(右翼)とテリス(左翼)の民に(それぞれの長として)与えた。そうして虎歳(750 年)に、私はチク族に向けて出軍した。

２月 14 日にケム(河畔)で私は(彼らを)打ち負かした。その月の[**日に]オテュケン(山)の西の端で、テズの河源地帯にて、カサルの西にて、私は玉座をそこに設置させた。私は墻柵をそこに打ち立てさせた。夏にそこで私は夏営した。私はそこに国境を設定した．私はそこに私の標識と碑文を作らせた。そうしてその年の秋に私、は東へ向けて進軍した。私はタタル族を査問した。兎の年(751 年)5 月まで……〔龍〕歳 (752 年) に……＝バシュと***アシュ＝オンギュズの河源地帯にあるイドゥク＝バシュの西方にて、ヤヴァシュ (河) とトクシュ (河) の合流地点にて、そこで私は夏営した。

私はそこに玉座を創設させた。私は墻柵をそこに打ち立てさせた。千年万日まで続く私の碑文と標識とを、そこに平らな石にて作らせた。私は (それを) 打ち立てさせた。

……また……という、(カルルク族のヤブグが？) 白い (高貴な) ベグと黒い (卑しい) 奴隷、その＜上に＞君臨したという．彼はキルギス族の方へ人を (使者として) 派遣したという。「おまえたちは出動せよ！ チク族を出動させよ！」と告げ、「私も出動しよう」と彼は言ったという。「注目せよ！ ブダカルの森で我々は集まろう！」と言ったという。 ……と言ったという。

……9 日に、私は軍を出動させた。***都督を隊長としてチク族に向けて千人隊を派遣した。彼の同盟者の土地に向けて私は少数の人を(使者として)派遣した。「見よ！(または、従え！)」と私は言った。キルギスのカンはキョグメン(曲漫山)の北側で……であったという。彼は自分の偵察隊を同盟者の土地へ送ったという。

その偵察隊を私の部下がそこで急襲し、情報提供者を捕まえたという。「彼ら(キルギス)のカンに向けて****人が来た。

カルルク族は彼らの同盟者のもとへは来なかった(または、彼らはカルルク族の同盟者の

もとへは来なかった)」と彼(情報提供者)は言った。男たち…… カルルク族……エルテイシュ(イルテイシュ)河を、アルカルの河源地帯の沼地にて男たちが葦(の筏? 橋?)を下側で[敷き詰つめて?支えてくれたおかげで?]、私は渡河した。

11 月 18 日に、私は******に遭遇した。ボルチュ河にいた三姓カルルク族を私はそこにて打ち負かした。そこから私は引き返して、下馬した(居を落ち着けた)。チクの民を私の千人隊が駆り立てて来た。……テズの河源地帯の(?)私の墻柵を私は夏営地とした。

私はそこに国境を設定した。私はチクの民に都督を任命した。私はイシュバラやタルカン(の称号)をそこで(彼らに)賜与した。 ……人(兵士? 斥候?)が来た。カズルク湖付近の****山から彼は見た。「敵が来ている」と言いつつ彼は来た。

15 日に、……タイガン湖に私は集合した。(腹心の部下である)帳幕設営人をそこから私は派遣した。(その?)[人]が来た。カラ=ヨタルカンを越えて連れてきた。[それに]対して私は進軍した。……となった。カルルク族に向けて彼(バスミル側の者?)は人(兵士? 斥候?)を派遣したという。 ……と彼は言ったという。「内にて私はかき乱そう」、「外から私は……しよう」と彼は言ったという。

バスミル族が敵となって私の帳幕(本営)の方へ向かって行った。私は彼らを服従させられなかった。外から三姓カルルク族が 3 つの聖山であるオテュケン……オテュケンで私は……そこで…… (753 年)6 月 21 日に、私は戦った。そこで私は勝った。イチュイを越えていって、***** を直接私は敗走させた。その後、テュルギシュ(突騎施)族がカルルク族から財物とテント(家)を掠奪し去ったという。私は私の帳幕(本営)に下馬した(落ち着いた)。 ……

敵となり……立ち上がって、彼らの土地に向かって行った。彼らを……???? 8 月、私は追いかけて進軍した。私の帳幕(本営)をエルセギュンにあるユラ湖(畔)に置いた. そこから私は追いかけた。 ……

バスミル族を[放置しておいて?] ……*月 21 日にカルルク族を近くで彼は[敗]った。ヨグラ=ヤリシュ(平原)で、私はその軍をそこで敗走させた。彼らのテント(家々)は 10 日前に驚いて立ち去ったという。私はそこから引き返して進軍して、下馬した(本拠に落ち着いた)。……

11[月]に(または、**月 11 日に) …… [私は敗走させた?] …… 私は***** の民のもとへ入った。イルリュンにあるタラキミンで私は敵に追い付いた。かつて唐にいたオグズ族と突厥族が出てきたという。そこで合流したという。そこでベグたちは……私の軍は 3……

500 人の軽装歩兵が一人二人と数えあってやって来た。民は(ウイグル可汗である)私の奴婢である、と天地の神が私にそこで仰せになった。そこで私は(敵)に勝った。……

そこで民衆は(私)に服属した。…… カルルク族の方へ逃げていった。そこから私は引き返して下馬し(本拠に落ち着き)、オルホン(河)とバリクリク(河)の合流点に国の玉座をそこに造営させた. ……

……(753 年)I1 月 20 日に、カラ=ブルクの東方のスカク=ユリ、そこにてチギル都督は……(私の軍に) トゥグルクを越えさせて、……私は勝った。カルルク族とバスミル族は……生き延びて……彼らは来た。……カルルク族の民…… (754 年)8 月 3 日に私は進軍した。……カルルク族の生き残りは出発して、テュルギシュ族のもとに竄入した. ……再び下馬して、10 月 2 日に、……彼は来た。北に**したという。……私は下馬した。そこ

から国境までバスミル族とカルルク族はいなくなった。羊歳(755年)に、
で、私は腰を落ち着けて夏営した。…… ［猿歳(756年)に］ …… 唐のカン(皇帝、ここでは玄宗)が(首都の長安から)西の方へ亡命していったという。……彼の息子(すなわち粛宗)を私は置いた(設置した? または、放置・黙認した?)。……の民衆……***を私は打ち立てた。そこに留まって、私はその帳幕(本営)のために幸運の装飾用纛を飾り付けた。
私の帳幕は広く、……私は行った。……民衆を、幸運……私の帳幕(本営)に、2月6日に下馬した。鶏歳(757年)に私は居を定めた。
……[犬歳(758年)に]……*** するために彼は与えた。彼は???一族をひどく滅ぼしたという。そうして彼はやって来た．**２人の生娘を(私に)奉仕に出[した?]**。……**して行くだろう。……私の帳幕(本営)、その(?)……「私は(可汗?)殿に背くまい」と彼(粛宗の使者と推定)は言った。「私は誤りを犯すまい」と彼は言った．「以前のようになろう!」……私はソグド人と漢人のためにセレンゲ河畔にバイバリク(富貴城)を建設せしめた……
……繋いだ彼の馬……知らない（？）……***を全て尽くして、逃げて……麦酒を……私は……***した。こうして碑文を……私は〔軍隊の〕長であった。……千（頭）の馬と（万匹の）羊を私は……私は勝った。……私は下馬した。……私は***した。私はもたらした。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

最初の行の「テングリデ＝ボルミシユ(天より生まれた)エル＝エトミシユ(国を建てた)ビルゲ(賢い)可汗」は、「天より生まれ国家建設を成した賢明なるカガン」だとバヤンチョルが自分のことを誇らしく紹介している部分で、自分が天の神と同じ地位にいることを知らしめています。

それまで突厥に従っていたウイグル人は、カルルク族とバスミル族といっしょになって突厥の支配から逃れました。それをなしとげたのはバヤンチョルの父親、クトゥルグ・ビルゲ・キョル・カガン（懐仁可汗）でしたが、バヤンチョルがカガンになってからも国内は安定せず、カルルク族やバスミル族、おまけに、いっしょに突厥と戦った九姓オグズの中からも反乱者が出てきました。タイ＝ビルゲ都督という名前が見えますが、彼が反乱を率いた人物です。

シネウス碑文は、自分がいかに勇敢に戦って国を堅固にしたか、ということを示す内容ですので、戦いの描写が念入りに行われています。じっくり読んでいると当時の戦いの様子が目に浮かんでくるようです。

シネウス碑文で特に興味を引かれるのは、最後のほうに見える**「２人の生娘を(私に)奉仕に出[した?]」**という部分です。この女性のうち一人はバヤンチョル・カガンに嫁いできた寧国公主と、彼女に付き従ってきた従妹の女性です。

唐では755年に安史の乱①が起こり、763年になってやっと鎮圧されました。ウイグル・カガン国の軍隊の援助がなければさらに長く反乱は続いていたことでしょう。このときに結ばれた協定により、唐は毎年二万匹の絹織物を贈るほかに、皇帝の娘(公主)をカガンに嫁がせることが取り決められました。

漢の時代にも公主が匈奴やチベットの王たちに嫁いでいましたが、だいたいは皇帝の親戚筋にあたる女性たちが公主に仕立てられていました。しかし寧国公主は当時の皇帝粛宗の実の娘で、何歳であったかはわかりませんが、幼い少女であったことがわかっています。

『旧唐書』②では、娘を嫁がせるときに粛宗(第十代皇帝)が涙を流したと書かれています。

> 粛宗は寧国公主を咸陽磁門駅まで見送りに行った。公主は泣いて言った。「国家のことは大事なことです。私は死んでも恨みません。」粛宗も涙を流しながら帰っていった。

この婚姻が行われたときに粛宗は 47 歳でバヤンチョル・カガンは 45 歳になっていました。当時は女性の結婚年齢が低かったとしても、自分の年と同じくらいの男に人質として幼い娘を嫁がせなければならない粛宗は、娘のけなげな言葉を聞いて、ひょっとしたら己のふがいなさを嘆いたのかもしれません。

バヤンチョル・カガンはこの婚姻のとき、唐に馬 2000 頭を含む莫大な贈り物をしましたが、唐側が公主に持たせる返礼品や持参金、持参品にも莫大な費用がかかったようです。

寧国公主が嫁いでから 1 年後にバヤンチョルは亡くなりました。寧国公主は殉死を迫られますが懇願して殉死を免れ、三年後に唐に帰りました。

余談になりますが、一緒に来ていた従妹の女性はどうなったかと言いますと、バヤンチョル・カガンとのあいだに子供を二人産んでいて、バヤンチョル・カガンが亡くなったあとは小寧国公主として三代目のブグ・カガン（牟羽可汗　?-779）に嫁いでいました。ブグ・カガンとのあいだにも子供がいたということがわかっています。

しかし、779 年、宰相であったトンバガ・タルカンによるクーデターが成功してブグ・カガンが殺されると、彼女と子供たちは宮殿から追い出され、結果的には殺されてしまいました。30 年間という長いあいだカガンのそばにいた小寧国公主は、政治的に何らかの影響力を持っていた可能性があり、バヤンチョル・カガンやブグ・カガンの血を引く子供たちの存在が将来の災いの種になるかもしれないと、トンバガ・タルカンたちが恐れたのかもしれません。

シネウス碑文やほかの碑文、そして中国の史書を読み比べてみると、当時の状況がさらに詳しくわかってきて興味が尽きません。

① 安史の乱……安禄山と史思明が玄宗皇帝の時代に起こした反乱。長安が一時的に反乱軍の手に落ちたが、ウイグルの支援を受けて七六三年に鎮圧された。唐朝はそのあとも一世紀にわたって続くは、これ反乱を機に弱体化が始まった。

② 『旧唐書』: 中国五代十国時代の後晋出帝の時に編纂された歴史書。唐の成立（618 年）から滅亡まで（907 年）の歴史的できごとが書かれている。

第３部　オグズ・ナーメ(オグズの書)を読む

『オグズ・ナーメ』は、テュルク語圏に住む人々に長いあいだ語り継がれて今に至っている英雄譚です。数種類の古い写本が残されていて、古ウイグル語で書かれたもの、チャガタイ語やペルシャ語のものもあります。ペルシャ語のものは突厥語からの翻訳です。

最も早く書かれたものとしては、新疆南部で発見された「オグズカガン伝説」の写本の断片があり、その時期は10世紀とされています。

『オグズ・ナーメ』というタイトルのものがもともとあったわけではありません。最初と最後の部分は欠落していて、残っている中間部でオグズ王が主人公になっているので、『オグズ・ナーメ』や『古代ウイグル史詩オグズカガン伝説』、『オグズカガンの伝説』、『オグズ神話』といったタイトルが付けられています。前後の欠落している部分に何が書かれているのか、どれくらいの量になるのかはわかっていません。写本の時期がさまざまで、そのときどきの政治状況に応じた変化が見られるようです。時代が下ると、「アッラー（イスラム教の唯一神)」の名前が最初に登場するものもあります。

『オグズ・ナーメ』は楽器の伴奏付きで語られてきたと思われます。声を出して読むとわかりますが、脚韻を踏んでいてとても調子がいいのです。日本では琵琶法師が琵琶の調べにのせて平家物語を語っていましたが、「壇ノ浦の合戦」のくだりでは昔の日本人は涙を流して聞いていたのではないでしょうか。昔のウイグル人も、血沸き肉躍るような合戦の場面を吟遊詩人が語るとき、興奮しながら聞き入っていたのかもしれません。

本翻訳は、1936年にイスタンブル大学より出版された『Oghus Kaghan destani(オグズ王物語)』を底本としました。原文の古ウイグル語の文字が現代トルコ語の文字に翻字され、現代文法による説明と現代語訳が付け加えられています。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
………………になるように」と人々は言った。
その姿はほら□のようだ。そうして彼らは楽しんだ。
ある日のこと、アイ・カガンの目が光り輝いた。男の子を産んだ。
顔の色は青く、口は火のように赤く、両の目は深紅、髪と眉は黒。
天の神よりも美しいほどだった。
母の胸から**初乳**を一口飲むと、もうそれだけしか飲まなかった。
生肉、料理、酒を欲しがった。すぐに言葉を話しはじめた。
四十日後には大きくなった。歩いた。遊んだ。
牡牛のような足、狼のような腰、黒貂(てん)のような肩、熊のような胸。
体は全身　毛で覆われている。家畜を飼い馬に乗り、狩りをした。
日々が過ぎ、いくつもの夜が過ぎ、若者になった。

この頃この土地に、大きな森があった。たくさんの流れがあった、川があった。
たくさんの獣がやってきた。鳥が飛んできた。
森には大きなクァト（一角獣）がいた。
家畜を襲い人間を襲っては食らう、大きくて恐ろしい獣だった。
人々に苦痛を与え、難儀に陥れていた。
勇猛果敢なオグズ王はこれを仕留めんと、槍と弓矢、剣と盾を持って狩りに出かけた。
鹿を一頭捕え、柳の枝で木に縛りつけた。
朝早くその場に戻ってきてみると、クァトが鹿を食ったのがわかった
次に熊を一頭捕まえて　金の帯で木に縛りつけた。
朝早くその場に戻ってきてみると、クァトが熊を食ったのがわかった。
そこでこの木に下に立ち待っていた。
クァトはやってくるやオグズの盾に突進してきた。
オグズはクァトの頭に槍を突き刺し、頭を剣で切り落とし、首を持って帰っていった。
再びその場に戻ってみると、一羽のハヤブサがクァトのはらわたを食っていた
矢を放ちハヤブサを仕留めて頭を切った。そしてこう言った。
「ハヤブサの姿はほら□このようだ。
クァトが鹿を食った、熊を食った、わたしの槍は鉄だったからクァトを仕留めた
ハヤブサがクァトを食った。わたしの矢は銅だったからハヤブサを仕留めた。
クァトに姿はほら□のようだ」

ある日オグズ王は天に祈りを捧げた。
四方が暗くなり、空から一条の青い光が差し込んできた。
太陽の光よりも強く月よりも明るかった。
オグズ王が光に近づくと、中に娘の姿が見えた。
美しい娘が、たった一人で座っていた。
その額には火のように輝くあざがあり、あざは金の杭(くい)のように見えた。〔金の杭＝北極星〕

娘はとても美しかった。
娘が笑えば天もつられて笑い、娘が泣けば天も泣くほどの美しさ。
オグズ王は娘を見るや我を忘れた。好きになった。連れて帰った。一緒に寝た。
願いがかなった。娘は身ごもった。
日々が過ぎ、いくつもの夜が過ぎ、彼女は輝いた。三人の男の子を産んだ。
長男を**太陽**と、次男を**月**と、三男を**星**と名付けた。

ある日、オグズ王は狩りに出かけた。前方の湖の真ん中に木が見えた。
木の幹の空洞に娘の姿が見えた。美しい娘が一人で座っていた
その目は空よりも青く、髪は川の波のよう、歯は真珠のようだった。
娘を見た者はだれでも「ああ、もうだめだ、死にそうだ！」と
ミルクがクムズ（馬乳酒）になるようだった。〔※酔ったようになってしまうという意〕
オグズ王は娘を見るや我を忘れた。心臓に火が付いた。
好きになった　連れて帰った　一緒に寝た
願いがかなった。娘は身ごもった。
日々が過ぎ、いくつもの夜が過ぎ、彼女は輝いた。三人の男の子を産んだ。
長男を**空**と、次男を**山**と、三男を**海**と名付けた。

オグズ王は盛大な祝いの宴を開くことにした。
人々に来るように命じると、彼らは話し合ってやってきた。
四十の卓、四十の腰かけを作らせた。
みんなは数々の料理、幾種類もの酒、そして甘いものや馬乳酒を
食べたり飲んだりした。

祝宴のあと、オグズ王は大臣と民に命を下した
「わたしは今、お前たちの王となった。盾と弓を手にとれ！
紋章よ、我らに運をもたらしたまえ。
蒼き狼よ、雄叫びを上げよ。
鉄の槍を林のごとく打ち立てよ。
野の馬を狩り場で走らせよう、大河が流れるその土地に。
太陽を旗印として、蒼天を天幕としよう」

オグズ王は命令の書をしたためて、
使者に持たせて四方に送った。命令の書には、
「わたしはウイグルのカガンである。世界のカガンとなるべきものである。
お前たちに服従を要求する。命令を受け入れる者には褒美を与え友情を結ぼう。
受け入れぬ者には怒りをもって、兵を集めて敵となろう。
すぐにも攻め込み滅ぼしてしまおう」とあった。

さてこのとき右方の地に、アルトゥン王という名の王がいた。（アルトゥン＝金）

アルトゥン王はオグズ王に使者を送り、
大量の金銀と大量の宝石を贈り、服従の意を示した。
オグズ王は彼との友好関係を結んだ。

左方に地にはウルム王がいた。
ウルムの軍の兵士は多く、町は多く、ウルム王はオグズ王の命令を受け入れなかった。
「いちいちそんな話を聞いていられない」と言って従わなかった。
オグズ王はこれに怒って攻め落すことを決め、
兵を率い、旗を掲げて進んでいった。
四十日後、ムズタグという山のふもとに着いた。
その場に天幕を張らせオグズ王はぐっすりと眠った。
まさに夜が明けようとするそのときに
天幕の一条の光が射しこんだ。
光の中から蒼い毛、蒼いたてがみの牡の狼が現れた
狼はオグズに、「おお、オグズ。お前はウルムの国を攻めようとしているな。
おお、オグズ。お前の前を歩いていこう」と言葉をかけてきた。
オグズ王は天幕をたたみ　軍を進めた
兵士の前を蒼い毛、蒼いたてがみの大きな牡の狼が歩いているのが見えた。
狼のあとに従い　進んでいった。

数日後、蒼い毛、蒼いたてがみの狼が立ち止まっているのが見えた。
オグズも兵士とともに立ち止まった。
そこにはイディル川（ボルガ川）という名の大河があった。
イディル川のほとり、カラタグ山の裾野で戦いが始まった
弓矢で　槍で　剣で戦った。
兵隊たちの間には多くの戦闘いがあった。
人々の間には多くの嘆きがあった。
戦いは激しくすさまじく
イディル川の水が赤くなった、真っ赤になった。
オグズ王は攻めた、ウルムの王は逃げた
オグズ王は国をとった、民をとった。
オグズ王の天幕は命のない戦利品、命のある戦利品（捕虜）で満ち満ちた。
ウルム王には弟がいた。その名をウルス公といった。
ウルス公は息子を山の上の街に送った。
山は深い川の向こうにあって　街の護りは堅かった。
ウルス公は息子に「お前は街を護らねばならぬ。
戦い抜いてわしのために守るのだ」と言った。
オグズ王はその街に攻めいった。
ロシア公の息子は大量の金と銀をオグズ王に差し出した。
「ああ、あなたは私の主君。父はわたしにこの街をくれました。

そして『お前は街を護らねばならぬ。戦い抜いてわしのために守るのだ」と言いました。
父があなたに敵意を持ったとして、それが私の罪となるのでしょうか。
わたしはあなたに従います。我らの幸福はあなたの幸福。
我らの実（子孫）はあなたの枝になる果実。
天の神はあなたに、地を支配するという恩恵を与えられた」
わたしはあなたに　この首とわたしの財産を差し上げましょう。
税を納め　あなたとの友好関係を崩すことはありません」
オグズ王は若者の言葉を気に入った。喜んだ。笑った。言った。
「お前はたくさん黄金を贈り、街を守った」
それゆえ若者をサクラプ（守った）と名づけ、友情を結んだ。

それからオグズ王は軍を率いてイディル川にやってきた。
イディル川は川だった。オグズ王は川を見て言った。
「イディル川をどのようにして渡ろうか」
軍隊に優秀な家臣がいた。名をウルグ・オルド・ベグ（偉大な宮廷の家臣）といった。
知恵のある人物だった。
見ると岸辺に多くの木があった。
彼はその木を切って中を削って、乗って渡った。
オグズ王は喜んだ。笑った。言った。
「おい、お前はここで領主になれ。そしてキプチャク（木の幹の空洞の部分）と名乗れ」

それから先へと進んでいった。
オグズ王は、蒼い毛、蒼いたてがみの狼を見た。
狼はオグズ王に言った。
「今すぐ軍隊を連れていけ。お前が進んで民衆と家臣を待て。
わたしがお前の前にいて道を示そう」
朝早く　狼が軍隊の前をいくのを見た。
オグズ王は喜んで、先へと進んでいった。
オグズ王はまだらもようの牡の馬に乗っていた。
この馬をかわいがっていた。
道の途中でこの馬が見えなくなった。逃げてしまった。
この地には大きな山が一つあった。上のほうは凍土と氷で、頂は寒くて真っ白だった。
それゆえに、その山の名をムズタグ（氷の山）といった。
オグズ王の馬はムズタグの中に逃げていったのだ。
オグズ王はこれを悲しみ心配していた。
軍隊に、なにものも恐れぬ勇敢な男がいた。
疲れも寒さも、ものともしなかった。彼は山に入った。進んでいった。
九日がたって　オグズ王のもとに馬を連れてきた。
ムズタグはとても寒かったので　彼は雪にまみれて真っ白になっていた。
オグズ王は喜んだ。笑った。言った。

「おい、お前はここで族長たちの長になれ。
これからお前の名をカルルク（雪が残った）とせよ」
彼にたくさんの宝石を与えた。

また先へと進んでいった。
道の途中、一軒の大きな家を見かけた。
壁は金、窓は銀、扉が鉄でできていた。
扉は閉まっていて鍵がなかった。
軍隊に一人、とても賢い男がいた。その名をトムルドカグルといった。
彼に命じた。「お前はここに残り、扉を開けよ。
開けたあとで本営に来い」
それでそこをカラチ（カル＝残れ！アチ＝開けろ）と名づけた。

また先へと進んでいった。
ある日、蒼い毛、蒼いたてがみの狼が止まった。
オグズ王もそこに止まり、天幕を張った。
そこは開墾されていない平原で、**ジュルジト**と呼ばれていた。
馬、牛、仔牛、金、銀、宝石がたくさんあった。
ジュルジトの王と民はここでオグズ王に対抗してきた。
オグズ王が勝利してジュルジト王が敗れた。
ジュルジト王は殺され首をはねられた。ジュルジトの民はオグズ王に従った。

戦いの後、オグズ王の軍や家臣や人々は
大量の戦利品を得た。あまりにも多くて運ぶのに馬、ラバ、牛が足りなかった。
オグズ王の軍に経験豊かで腕のいい男が一人いた。名をバルマクルグ・ジョスン・ビルリグといった。
腕のいい男は大きな荷車を作った。
荷車の上に命のない戦利品を載せた。
荷車の前に命のある戦利品（捕虜）を付け、引かせて進んでいけるように。
家臣と人々はみなこれを見た。驚いた。
みなもそれぞれ荷車をつくった。
荷車が進むたびに「カンガ、カンガ」と音を立てた。それでその荷車に「カンガ」という名前を付けた。
オグズ王は荷車を見た。笑った。言った。
「カンガ、カンガと音を立て　命のない獲物を生きている獲物に運ばせよ。
カンガルクをお前の名にしてカンガを知れわたらせよう」
そして再び進んでいった。

それから蒼い毛、蒼いたてがみの狼とともに
シンド、タングート、シャームに攻めていった。

多くの激しい戦いの後　これらをとった　自分の国にした
このほかに、言っておかねばならぬことがある。
南にバルカンという土地があった。大きくて豊かで暑い土地だった。
たくさんの獣、たくさんの鳥がいた。大量の金、銀、宝石があった。
人々の顔の色は真っ黒で、土地の王はマサルといった。
オグズ王はその地に攻め入った、
激しい戦いだった。オグズ王が攻めた。マサル王は逃げた、
オグズ王は国をとった。オグズ王の味方は大いに喜び、敵は大いに悲しんだ。
この戦いで数え切れぬほどの物、馬、家畜を手に入れて、故郷に戻っていった

このほかに、言っておかねばならぬことがある。
オグズ王のかたわらに、白いあごひげ、灰色の髪をたくわえた、経験豊かな老人がいた。賢明で温厚で宰相職を務めていた。その名をウルグ・テュルク（偉大なテュルク）といった。
ある日のこと　彼は夢を見た
夢の中で金の弓を見た。三本の銀の矢を見た。
金の弓の端は日の出から日の入りまで届き
銀の矢は夜(北)の方向へ飛んでいた。
夢から覚めると　オグズ王に告げた。
「ああ、カガンよ、あなたが長寿でありますように！
　ああ、カガンよ　あなたが幸運でありますように！
　天が夢でお告げをくだされました。『とった土地を子孫に譲るように』と」
オグズ王はウルグ・テュルクの言葉を聞いて喜んだ
助言を求め、助言に従った。
兄たち(最初に生まれた三人の息子)、弟たち（次に生まれた三人の息子）を呼んでこう言った。「ああ、狩りをしたいが、年をとって力がなくなった。
日よ、月よ、星よ、お前たちは夜明けの方へ行け、
空よ、山よ、海よ、お前たちは夕暮れのほうへ行け」と言った。
三人は夜明けの方へ向かい、三人は夕暮れの方へ向かった。
日、月、星はたくさんの獣を狩ったあと、道の途中で金の弓を見つけた。
持ってきて父親に差しだした。
オグズ王は喜び笑った。それを三つに折って言った。
「おお、兄たちよ　弓はお前たちのものにしよう。弓のようになって矢を天まで放て」
空と山と海はたくさんの獣を狩ったあと、道の途中で三本の銀の矢を見つけた。
持ってきて父親に差しだした、
オグズ王は喜び笑った。矢を三人に分け与えて言った。
「おお、弟たちよ　矢はお前たちのものにしよう。弓は矢を放った。お前たちは矢のようになれ」
　それからオグズ王は大きな会議を開くことにした。
　家臣や領民を呼んだ。彼らはやってきて話し合った。

オグズ王は大きな天幕にいた/////
右方に四十ひろの棒を立てさせた。
上に金のニワトリを一羽止まらせた。下に白いヒツジを一頭つながせた。
左方に四十尋の棒を立てさせた。
上に銀のニワトリを一羽止まらせた。下に黒いヒツジを一頭つながせた。
右方にブズク(※)たちが席をとり座り、左方にウチオクたちが席をとり座り、
四十日間、みんなは食べたり飲んだりして楽しんだ。

カガンは息子たちに国を譲った。そして言った。
「おお、息子たちよ、わたしは長くこの世で過ごした。
多くの戦いを見た、多くの槍を投げ多くの矢を射た。
馬にまたがり長い旅をした。
敵を泣かせた、味方を幸せにした
天に対しての義務を果たした
お前たちに国を譲ろう。」
/////

※「ブズク」はブズオク派のことで、太陽、月、星の子孫とされる 12 部族を指し、「ウチオク」はウチオク派のことで、空、山、海の子孫とされる 12 部族を指している。これらの 24 部族の名前はイランの歴史家ラシードゥッディーン(1247-1318)の『集史』に記されている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『オグズ・ナーメ』でオグズ王の姿は「顔の色は青く、口は火のように赤く、両の目は深紅、髪と眉は黒。」「牡牛のような足、狼のような腰、黒貂(てん)のような肩、熊のような胸。体は全身毛で覆われている。」と描写され、完全に人間の姿ではありません。人間にはない力を持ったものとして描かれています。

古事記の中の「ヤマトタケル」も人間離れした力で縦横無尽の活躍をしますが、このようなスーパーヒーロー的な登場人物が現れると物語はがぜん色彩を帯びてきて、聞く者の興味をさらに引き付けます。

『オグズ・ナーメ』では光の中から現れた「蒼い毛、蒼いたてがみの狼」が彼の遠征を先導して戦勝をもたらしますが、これは普通の狼ではありません。神の化身なのです。

ウイグルには狼が出てくる始祖伝説があります。匈奴の王の美しい娘が、狼に姿を変えた神と結婚して子供が生まれ、だんだんに子孫が増えて、それがウイグル人の祖先となった、というものです。突厥にも狼が関係する始祖伝説があります。戦争で傷を負った子供を牝の狼が育て、その子が大きくなったときに結婚して子供たちが生まれ、彼らが突厥の始祖となったというものです。狼が父親となるか母親となるかの違いはありますが。

また、オルドス高原にある紀元前七世紀の匈奴の遺跡からは、狼が鹿を捕えている図柄が描かれた精巧なつくりの美しい金製の王冠が発見されています。古代の匈奴、突厥、ウイグルの人々は狼の精悍な姿、整然と群れを作って狩りをする様子などに憧れを抱き、狼の強さを取り入れたいと願ったのかもしれません。

『オグズ・ナーメ』では各所に、古代のウイグル人が自然を崇拝していたことを示す記述があります。オグズの二人の妻は光の中と木の幹の空洞の中にいますが、これは彼らが狼と共に、光と樹木を信仰の対象にしていたことを物語っています。日食や月食、とつぜん襲ってくる台風、噴火を起こす山などを見て、何かの力が働いていると思うのは、科学的な知識のない時代の人々であれば当然のことですし、21 世紀に生きる人々のあいだにも、まだ自然崇拝の名残はあります。各地の神社に「ご神木」と呼ばれる木があって地域の人に大事にされているのはよく見かける光景で、「ご神木」はだいたい大木です。数百年の風雪を耐えてきたその木の持つ生命力を感じ取り、見る人が畏怖の念を感じ、「ご神木」として守られるようになり、それが今に続いているのです。

ウイグル人は自然物や自然現象を、自分たちに力を授けてくれるもの、自分たちを助けてくれるものとして崇拝の対象にしました。オグズ王の子供たちに太陽、月、星、山、海、空という名前が付けられたのもその表れです。

最後に、オグズということばはどういう意味を持つのか、少し説明しておきます。

REDHOUSE の「Turkish/ottoman-English　Dictionary(トルコ語・オスマン語・英語辞書)」によると、「伝説上のテュルク人の英雄の名,南西アジアに住んでいたテュルク系部族の人の名前」とありますが、古語における意味として「心の純粋な人,善人、強健な男、粗野な人、単純な人、経験の無い人、愚かな人」が挙げられています（語意が徐々に変化していくのがわかります)。ウイグル語では「初乳」という意味があります。

日本では、「オグズ（語源は不明だが連合体を意味するか)『中央ユーラシア史（山川出版社,2000)』」とか、「ウイグル族はもともと Uy+Oghur で「正しい人々の集団」という意味『シルクロードの経済人類学（東京農業大学出版会,2007)』」というのがあります。

Oghur（オグル）は　Oghuz（オグズ）の最後の z の音が r の音に変化したものです。

オグズの意味がどんなものであれ、オグズ王がテュルク語圏の人々のあいだで永遠に語り継がれる英雄であることは間違いありません。

・・・

原文出典：OGUZ KAGAN DESTANI, W.BANG VE G.R.RAHMET, Istanbul Universitesi Edebiyat Fakultesi Turk Dili Semineri,Neshiriyatindan, Burhaneddin Basimebi, Istanbul,1936.

タイトル図は『Diriliş Ertuğrul』〈https://www.facebook.com/Dirilisdizisi/〉より。

吟遊詩人の図は『Turk Destanrlari…』より。

〈http://eyuboglu.somee.com/forum.asp?konuyu=oku&konune=124&tip=1#sthash.jVcCtn12.dpbs〉